

# 戦後漢文教育実践史の展開

『新しい漢字漢文教育』誌を中心に――

渡辺 春美

## はじめに――問題の所在――

漢文教育には、戦後（一九四五年～）に限っても七〇年を超える歴史があるが、その内実の史的把握は十分になされてこなかった。漢文教育実践の成果と課題を史的に把握することが実践の充実と発展には欠かせない。本稿では、史的把握の一環として、『新しい漢文教育』の創刊号（一九八五年）から誌名変更後の『新しい漢字漢文教育』四〇号（二〇〇五年）に掲載された漢文教育実践論考の内、漢詩教材の高等学校における実践論考を中心に考察していく。考察の観点として、漢文観、興味・関心・問題意識の喚起、学習材の開発・編成、主体的学習の保証、付けるべき読む力の設定、協働的学習、創造的読みと批評、学習者による批評をとおした内化の八点を設定したい。<sup>(注1)</sup>

## 一 『新しい漢字漢文教育』誌の特色

現在の会誌『新しい漢字漢文教育』は、一九八五（昭和六〇）年一〇月に、『新しい漢文教育』として、全国漢文教育学会によって編集刊行された。

会誌の創刊は、「大学漢文研究会」（一九五五年一月発足）の「全国漢文教育学会」への移行を契機としてなされた。発刊の目的は、創刊号の「編集後記」に、「研究と現場の二本建てにして、会員相互の親睦と啓発を密にするための会誌として、中、高、大学の先生方にも読んで頂けるような幅の広いものにした」という編集方針<sup>(注2)</sup>に看取れる。会誌『新しい漢文教育』は、二五号（一九九七年一月）で終刊となり、二六号（一九九八年五月）からは、「学界の改組に因り」<sup>(注3)</sup>誌名を『新しい漢字漢文教育』にしている。特色については、「漢字漢文教育の実践から漢文学の研究にわたる幅広い領域を網羅した本会誌は、現在ではわが国で唯一の漢字漢文教育の専門雑誌として、教育界をはじめ各界に大きな影響を与えつつ発展してまいりました」<sup>(注4)</sup>という言葉に示されている。

## 二 漢文教育実践の背景

### (一) 学習指導要領

対象とした実践は、高等学校学習指導要領国語編の範囲で言え、一九七八（昭和五三）年版から一九九八（平成一〇）年

版の間に行われた。一九七八（昭和五三）年版は、一九七〇（昭和四五）年版学習指導要領の能力主義を転換した。詰め込みや落ちこぼれ等の教育問題が社会的な批判を招いたことを受けたものである。本学習指導要領からは、国語科の領域構造が「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」の四領域から、「理解」「表現」「言語事項」の二領域一事項へと転換された。古典は前学習指導要領で能力主義に基づく教科内容の充実を求めてきたが、改訂によって「国語Ⅰ」（必修）・「国語Ⅱ」（準必修）で学習するほかは「古典」（選択）のみになった。内容を軽減し、親しむ古典教育を求めることになったといえる。

つづく一九八九（平成元）年版では、物質的豊かさ、情報化、国際化、多様化、高齢化などの社会変化の拡大、加速化による学習者の生活や意識の変化に配慮することを求めて改訂された。古典教育は、国際化の中に位置づけて重視し、「国語Ⅰ」（必修）・「国語Ⅱ」（選択）で学ぶほかに、「古典Ⅰ」・「古典Ⅱ」・「古典講読」（すべて選択）の学習が可能になり、古典教育の拡充が目指された。一九九八（平成一〇）年版では、教科の領域構造が、「話すこと・聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」と言語事項の三領域一言語事項に改編された。古典は、「国語総合」（選択必修）で学習するほか、「古典」（選択）・「古典講読」（選択）で学習が可能になった。本学習指導要領からは、言語活動による古典教育が目指されるところに特色がある。言語活動の重視は、一九七八年版からしだいに重視されるに至った。経歴主義と能力主義を止揚してなったといえる。

考察の対象とした実践は、この三学習指導要領の時期に当たるが、施行時期を勘案すれば、一九七八年版・一九八九年版の時期が中心であったといつてよいであろう。この二つの学習指導要領は、国語科の領域構造が、二領域一言語事項の時期にあった。「古典」は「理解」領域に特化されているが、「表現」と「理解」の各領域は、「生徒の言語能力の発達のため、相互補充的な意味を持っている。」とされ、「生徒の学習活動」・「教師の指導のねらい」・「教材そのものの関連」において相互補充に配慮することが全科目において求められた。理解と表現の関連指導が強調されたといつてよい。一九八九年版においても「言語能力相互の関連（二領域一事項）」が同様に強調されていた。<sup>(注6)</sup>

## （二）漢文教育実践者の問題意識

漢文の授業を担当する高校教員は、漢文教育にどのような問題意識を持っていたのであろうか。以下の引用に探ってみよう。

①国語教育の雑誌などで、よく「漢文離れ」ということが言われる。（中略―渡辺）小学校・中学校・高校と、生徒を取り囲む社会の言語環境から「漢文」と生徒を結びつけることばや故事や歌、さらに言えば漢字が急速に減少しつつあるのは確かである。（中略―渡辺）我々教員の中にはびこる句法偏重の意識は根深いようである。丁寧に体系的に段階的に読解力をつけさせようという意識の強すぎるためか、古文などでも、文語文法をやらないと文章に入れない

いと考えたり、助動詞の意味・活用形や助詞の用法といったことが往々にして授業の中心になってしまっていたりするきらいがある。(長谷川国男「漢文の授業をめぐって」六号 一九九八年四月)

②授業において、語釈・口語訳・鑑賞等を教師が中心になって行くと、いきおい生徒も受け身の学習を強いられることが多くなるように思われる。(田澤峰夫「漢詩の指導―『涼州曲』の授業展開―」一二号 一九九一年五月)

③詩には、散文以上に、読み手が自身の心で感じ取るという要素が強い。語句の意味に広がりがあり、省略や、時には飛躍もあって、表面的な意味をおさえるだけでは詩を理解したことになる。(中略) 受身でなく一人一人の生徒が実感として詩をとらえられるようにするにはどうしたらいいのか。(島田弥生「訳詩を用いた漢詩指導の試み―理解・表現領域との関連で―」一八号 一九九四年五月)

④漢文を授業で取り扱う際、どうしても口語訳・語釈に終始しがちになってしまい、高校生の漢文嫌いを助長してしまっているのではないか、漢文を取り扱うとき、常に自問自答していることである。教師の一方的な講義に終始せず、学習者が主体的に作品世界に入っていくような取り組みはできないだろうか、といつも頭を悩ませる。(笠井幸博「表現指導の一つの試み―漢文を短歌にしてみた―」二六号 一九九八年五月)

⑤国語の授業から漢文教材を扱う時間がどんどん削られて

いるということは、かなり以前から指摘されていることである。今、古典から独立した「漢文」の授業が成り立っている学校はどれだけあるだろうか。国語の時間数も減らさざるを得ない状況にあつて、国語の中でまず削られるのが漢文という現状はこれからも変わることはないだろう。／  
そもそも生徒の側に「漢文なんてなんでやるの。」という意識がある。将来何の訳にも立たないと言っているのである。(岸田直子「漢字・漢文学習を通して生徒の心に残したいもの」三三三号 二〇〇一年一月)

上記からは、学習者の「漢文嫌い」「漢文離れ」、受動的学習が指摘され、漢文の授業の削減、社会の言語環境からの漢文に関わる文化事象の衰退など、漢文を取り巻く環境の問題が取りあげられている。また、教員の句法偏重の意識と語釈・口語訳中心の授業が課題とされ、学習者が主体的に作品世界に入り、実感とともに理解を深める方法に関する問題意識が記されている。学習者の「漢文嫌い」等の意識や受動的態度は、漢文の学習環境や形式操作的な読解方法等に関わって生じているとも言え、また、学習者主体の授業方法の不足にも拠っていると考えられる。一方、付けるべき読む力に関する意識は乏しい。

### 三 高等学校漢文教育実践の展開

#### (一) 高等学校漢詩学習指導の概観

以下、対象とした論考の漢文の学習指導を、1教師主導の学習指導、2表現活動を取り入れた教師主導の学習指導、3表現を取り入れた主体的学習指導の三つに分けて概観することにした。2・3は、学習指導要領における、国語科の領域構造の転換による表現・理解の関連指導の影響が窺えるものである。

#### 1 教師主導の学習指導

河内利治「公開研究授業報告―第五回全国漢文教育学会大会―」(九号 一九八九年一月)は、高校一年生を対象とし、日本漢詩、頼襄「送母路上短歌」を教材とする研究授業の報告である。本時の目標は、古詩形式の長編詩への慣れと近体詩との詩形式の相違の理解、作品の意味内容の理解と心情鑑賞、日本漢詩の知識と漢詩に親しむ態度の育成の四点である。授業は、導入・前時の復習(白居易「燕詩・示劉叟」)↓展開・頼襄「送母路上短歌」の読み(範読・一斉読み・指名読み)↓中国語による音読紹介↓読解と理解↓鑑賞↓生徒の感想↓まとめ・全員による朗読↓次時の予告と展開した。鑑賞が意図されているが、読解中心の授業に終わっている。参観者のアンケートには、「鑑賞こそがこのような作品では命だと思うが、その点が今回の授業には欠けていたのでは?」とする感想が見える。

渡辺雅之「漢詩教材の鑑賞と作者との関係―『江雪』をめくつ

て―」(一三号 一九九一年二月)は、鑑賞における作者の位置づけを実験的授業において解明しようとした。対象は高等学校二年生、教材は「江雪」(柳宗元)である。授業は、漢詩(訓読文)と語注のみ板書して鑑賞、漢詩と語注に加え、作者の経歴を板書して鑑賞という二種類の方法をクラスごとに行った。二クラスの学習者の鑑賞文を分析し、あらかじめ作者の経歴は与えない方が鑑賞の幅が広がり、何とか自分で鑑賞しようとする態度を養うことができる」と結論づけている。

佐藤哲広「郷土のジャーナリスト、陸羯南」(一九号 一九九四年一〇月)は、郷土の漢詩教材の開発による授業の報告である。導入で、陸羯南の略歴、子規との交友に触れる。展開は、学習指導要領の「人間・社会・自然などに対する様々な時代の人々のものの見方・感じ方・考え方について理解を深める。」を目標としている。教材は、「客懐」を中心に、「送別と題す」、「悼井上梧陰先生」の二首であった。授業は講義型でなされたと推察する。授業者は、授業を「羯南詩を授業で読み進めていくに従って、今までの表情と違った生徒の反応を確かめることができた。それは、(一)漢文が身近に感じられたこととあり、(二)郷土を知る上にも有意義であった」と評している。

大塚美枝子「古典Ⅱ漢文における漢詩の指導―他教科との関連と、広がりを持たせる授業―」(二七号 一九九八年一月)では、「長恨歌」(白居易)と漢詩(言志言情の文学)の授業が報告されている。「長恨歌」の授業は前半と後半に分けて進め

られた。対象は高等学校三年生、全八時間。前半は、叙事的要素が強いことにより、詩句を解釈しながら史実やエピソードを年表や地図を活用して語り聞かせる方法を採用した。後半は、文学的虚構の世界であることを踏まえて、夢幻的表現の美しさを鑑賞する授業である。「生徒達は内容の面白さを感じたようでした。訓読もセッセと学習した」とある。

漢詩（言志言情の文学）の授業は、高等学校三年生を対象に、全七時間をかけている。教材は、教科書による、「関雉」（詩経）、「七步詩」（曹植）、「登幽州台歌」（陳子昂）、「将進酒」（李白）、「兵車行」（杜甫）、補足教材として「碩鼠」「陟岵」（詩経）、「野田黄雀行」（曹植）、「古風」「戰場南」（李白）、「壳炭翁」（白居易）が用いられた。他に、年表・授業の説明の要点を書いたプリント等が準備されている。指導目標は、中国文学を特徴付ける「言志」の理念に基づく、作品の理解・鑑賞の深化、詩の史的概観、漢詩と日本の詩（和歌・古今集「仮名序」）の対比による理解、という三点であった。授業は、授業者の漢文学に関する深い理解をもとに、教材を開発・編成して組み立てられ、参考プリントも工夫して作成され、興味深いものとなっているが、授業の実際は、説明、解説中心の授業であった。授業者は、「今後の課題」として、「教師の解説を減らし、生徒の感想を引き出すこと」と記している。

塚田勝郎「公開研究授業報告―第一七回全国漢文教育学会大会―（コンピュータを利用した唐詩の指導）」（二三三号二〇〇一年一月）は、授業のねらいに、「コンピュータのマ

ルチメディア性を『学習の道具』として漢文の授業に利用すること」を置いている。教材は、教科書掲載の「送元二使安西」（王维）、「静夜思」（李白）、「秋風引」（劉兎錫）、「江雪」（柳宗元）である。本時は、全七時間の一時間目、目標は、コンピュータの特性を生かした、ひびきやリズムの味わいによる導入、押韻や起承転結など唐詩の規則への関心の喚起、漢文訓読の意義と方法の再確認、文字入力の基本とインターネット利用の留意点の学習の四点である。設定された課題によって授業の展開を示すと、①中国語朗読を聞き、どの漢詩かを推測、②推測の根拠提示、③「送元二使安西」の訓読朗読を聞き、画面の訓読との相違発見、④東堂明保「漢文入門」の引用文を読み、訓読の意義と方法の重要点と印象に残る点にサイドライン、⑤引用文を参考に詩句の分ち書き、⑥詩句中の地名にサイドライン、⑦書き下し文作成であった。最後に授業の感想を書かせている。学習者は、「今日は面白かった！中国語も聞けたし、吟詠も聞けたし・・・、漢文がさらに好きになった。」と述べ、パソコンによる授業の新鮮さにも触れている。パソコン使用、中国語による朗読や吟詠によって興味・関心を喚起した授業である。

## 2 表現活動を取り入れた教師主導の学習指導

北澤正志「漢文指導から表現指導への展開」（二三三号一九九六年一月）は、漢文の表現に学んだことを活用して学習者の表現に繋げることを行った実践の報告である。漢文については、自国の文化・伝統に対する関心や理解を深めること、

国際理解・国際協調の精神の養育にふさわしい教材が多いとし、簡潔で力強く、リズム感があり、内容的に明瞭で、短文の中に含蓄があり、明確な論理性を持つ点に特徴を見いだしている。授業の対象学年、時間数不詳。漢詩教材は、「登鶴鶴樓」(王之涣)・「月夜憶舍弟」(杜甫)である。目標は、漢詩の情景と心情とを関連を考えながら読み味わい、学んだことを生かして情景描写を含んだ詩を作る点に置かれている。まず、漢詩の形式・押韻・対句の確認を行った。ついで、前者の漢詩は、スケールが大きくダイナミックな動きを具体的にイメージする指導、後者は、5W-1Hを確認し、表現の巧みさを指導している。その上で、明確な主題、主題につながる情景のイメージ化、読み手に伝わる材料の選択、詩の中に自己の存在感を表現という四点に留意して詩作を行わせている。授業者は、詩作について、情景と心情の関連では満足できたが、心情表現が直接的で個性がなく、表現には工夫が見られなかったと評価している。

不破幸雄「入門期における漢詩の指導―知的好奇心をそそる授業をめざして―(一〇〇分授業)」(二八号 一九九九年五月)は、イメージ化することで、詩の世界を映像としてとらえるよう心掛ける授業を報告したものである。漢詩については、少ない字数の中に無辺の広がりを持つ、中国文学の中でも特異な位置を占める文学形態で、イメージ化が容易だとしている。対象は高等学校一年生、授業では、「竹里館」(王维)・「春曉」(孟浩然)を既に終えて、実践報告は、「山中与幽人对酌」(李白)を主になされている。授業は、①漢詩の朗読(中国語・日本語、

黙読・音読、②押韻確認、③漢詩から受けるイメージ発表、④『漢語林』を利用し、漢字の成り立ちから「幽人」・「对酌」・「醉」の意味追求、⑤「春曉」との対比から「隱者」についてのイメージの明確化、⑥漢詩から受けるイメージを再度鮮明化、⑦酒と詩人の関係説明、⑧詩のイメージを画用紙に書き映像化、⑨詩と映像をもとに解釈、模範的な解釈の提示、という展開である。本実践の特色は、漢詩をイメージとその解釈によって鑑賞しようとした点に特色が見える。イメージも解釈も多くが授業者の主導によってなされている。

大松博典「公開研究授業報告―第一八回全国漢文教育学会大会―(漢詩の世界) 研究授業顛末記」(三五号 二〇〇二年二月)は、授業のねらいが、漢詩のルールの確認、優れた漢詩の鑑賞、漢詩に挑戦という三点に置かれている。対象は高等学校三年、教材は、「秋浦歌」(李白)・「江雪」(柳宗元)・「涼州詞」(王翰)・「風橋夜泊」(張継)である。授業は、導入①漢詩の本質、展開②漢詩(絶句)の規則(四句・押韻・平仄)確認、③名作鑑賞―「秋浦歌」・「江雪」・「涼州詞」・「風橋夜泊」、④漢詩創作(平仄の説明、「詩語表」を参考に詩作)と展開した。学習者の詩作の実際は明らかではない。

### 3 表現活動を取り入れた主体的学習指導

長谷川国男「漢文の授業をめぐる」(二六号 一九八八年四月)は、漢文の授業をめぐる状況を論じることが大半を占め、漢詩実践の報告は簡略である。漢文については、千年二千年の歴史

の重みに耐えてきた、生徒を引きつける魅力を持つものにとらえている。本実践は、「自分なりの解釈を発見させること」に魅力があるとし、創造的な訳詩を試みている。訳詩の指導について、「これだけのものが出てくるというのは、驚きであり、またうれしくもある。文法や句法ばかりで追わず、生徒の内面に作品が浸透し、響いたものを引き出してやれるような漢文の指導も意識して心掛けていきたいものである。」と評価している。漢詩の訳詩が内化と創造の問題として意識されている。

田澤峰夫「漢詩の指導―『涼州曲』の授業展開―」（二二号一九九一年五月）は、「漢詩の学習に少しでも興味関心を高め、意欲的・主体的に取り組ませるように工夫」して行った授業の報告である。対象は高校二年生、教材は、「黄鶴楼」<sup>（崔顥）</sup>・「子夜呉歌」<sup>（李白）</sup>・「送孟浩然之広陵」<sup>（李白）</sup>・「涼秋曲」<sup>（王翰）</sup>・「登岳陽楼」<sup>（杜甫）</sup>であった。授業は、①事前に漢詩と当代の詩人の説明、②教材提示、注意すべき語句三つ、疑問点・問題点を提出、③注意すべき語句と疑問点・問題点（地理・歴史的背景・筆写または登場人物の状況等）を集約し、課題提示、④グループ発表を中心に一時間一詩で五時間展開（詩型・押韻、口語訳・内容理解）、⑤鑑賞文・情景やイメージの絵画化・五七調の訳詩創作へと展開した。論考は、「涼州曲」の授業を中心に報告されている。担当グループは、「西域における中国と異民族との戦争の歴史」、「防人歌」についても発表した。中国音のテーパーも二種類聴かせることがなされている。本実践は、疑問や問題意識を持たせて関心を高め、グループに

よる発表を中心に授業が展開され、地理的・歴史的背景、および防人歌との比較、さらに創造的表現を通して理解が深められたところに特色がある。

江川順一「表現活動を取り入れた漢文の授業―新聞広告の使用と唐詩の群読―」（二九号 一九九四年一〇月）は、職業高等学校（商工）で一年生を対象とした実践の報告である。一年間に教科書教材と自主教材を用いて五単元が計画されている。その内の第四単元の七時が「送元二使安西」（王維）の陽関三疊による群読の授業であった。目標は、地図を利用した理解の促進、陽関三疊により群読を楽しむことであった。授業は、①ウイグル族の帽子をかぶって入室し、荒涼とした西域の風土を説明し、友人を送る詩の学習へと導入、②音読・朗読（中国音を含む）、③王維と元二に関する説明、④友を送る王維の心情理解、⑤地図資料による背景説明、⑥陽関三疊（一串珠三疊…各句五文字と三文字の繰り返し）によるグループ群読へと展開した。本実践の特色は、導入によって一気に学習者の興味・関心を高め、音声言語活動によって、楽しみつつ漢詩を群読することを通して漢詩の内化が促進されたことに見いだされる。

笠井幸博「表現指導の一つの試み―漢文を短歌にしてみたら―」（二六号 一九九八年五月）では、漢詩と「完璧」（『十八史略』）の授業において短歌作りを行っている。【後述】

高屋定房「高校『古典講読』（二年）での実践報告―静夜思・絶句―」（二九号 一九九九年一月）は、小・中・高一教材による実験的な授業の一環である。高屋定房は、「詩を読む

ことの大筋」を、「言葉の意味、構成、表現の特徴や方法（響き・比喩・象徴・対比・口調・繰り返し・手法など）を手がかりに想像力を駆使して詩の世界を捉え、味わい、それに対する自分の感想や考えをまとめ、表現する、言うまでもなく参加生徒同士の意見交換や議論、探究、評価が行われること」としている。また、「個々人の感性が動かねば、少なくとも詩を読むことにはならない」と加えている。対象は高等学校二年生、教材は「静夜思」（李白・「絶句」（杜甫）である。目標は、じっくり読み、詩としての漢詩の面白さを味わう、素朴な疑問に自ら解決の道を探る、という二つである。全五時間。授業は、漢詩二編とも、次の通りであった。①白文をノートに筆写、②質問を別紙にまとめ、③感想の筆記、④質問・感想の発表、⑤既有の知識、辞書を用い訓読、⑥現代日本語訳の共通理解、質問と感想の筆記と発表、⑦日本語訳の再度の試み、⑧その上で、二編の漢詩から一つを選び絵と鑑賞文の執筆、⑨作品全てをコピーし配布のようにじっくり白文につきあわせることはしてこなかった。語法や日本語訳に気を取られない状態で詩に向き合うことで自らの読解への道を開拓していく可能性が見つけれられたと思われる。」と述べている。本実践は、自ら疑問を見いだし解決を協働で図り、理解を共有し、絵と文章による創造的な鑑賞を行わせたところに特色が見える。

## (二) 高等学校における漢詩指導の実際―笠井幸博の場合―

笠井幸博は、「表現指導の一つの試み―漢文を短歌にしてみたら―」（二六号 一九九八年五月）において、「口語訳・語釈に終始しがち」で「高校生の漢文嫌いを助長し」かねない授業を、「学習者が主体的に作品世界に入っていけるよう」に改善することを求め、授業実践を報告している。

論考には、「漢詩と「完璧」に基づく短歌作りの実践が報告されている。ここでは、漢詩の場合を取り上げる。

- (1) 対象…高等学校二年生
- (2) 教材…「桃夭」（詩経）・「責子」（陶潜）・「登幽州台歌」（陳子昂）・「子夜呉歌」（李白）・「石壕吏」（杜甫）。
- (3) 展開…以下の通りであった。

- ① 五首の漢詩の内容を理解する。
- ② 一首を選び主題、情景及び心情を基に短歌を作成し、工夫点を書き添える。
- ③ 短歌の全作品一覧表にして提示する。
- ④ もとの漢詩と短歌を比較し、良いと思う作品を一つ選び理由を記述したものの一覧表を作成し、提示する。
- ⑤ それぞれに学習者の批評を付した一覧表を見ながら、各自の短歌を手直しする。

（笠井幸博「表現指導の一つの試み―漢文を短歌にしてみたら―」（二六号 一九九八年五月 全国漢文 教育学会 三六頁参照 注―番号は改編した。）

展開の「①」では、漢詩のリズムを身体で覚えさせるために



朗読・暗唱を重視した。また、漢詩で表現された世界を、学習

者自身が再構築して、自分の言葉で表現した。内容理解については、学習者が自由に鑑賞することを求めて、語釈・押韻・口語訳に留めている。また、「②」においては、漢詩の主題、情景などの内容をある程度詳しく書かせるようにしている。

#### (4) 学習者の反応

「責子」の読みを短歌にした六人に関しては、「六人六様の感じ方が表れており、とても興味深い。ただ感想を書かせるだけでは見えてこなかった、生徒一人一人の感じ方、味わい方が短歌を通して見えてくる」と記している。

例えば、学習者は、「子夜呉歌」（李白 長安一片月／万戸擗衣声／秋風吹不尽／總是玉関情／何日平胡虜／良人罷遠征）を、次の通りに短歌にしている。

- ・ 月が出て秋風が吹き思い出す／風と共に会いに行けぬか
- ・ 君のいる玉門関にかかる月／この長安にも同じ月かな
- ・ 月明かり一人てられ寒い夜／待ちに待つ日はいつだろ  
うか

- ・ 秋風よ想いを運べ玉関へ／かの人の無事祈っていると
- ・ 月明かり闇の中さへふくれくる／愛する人へのつるの想  
いは

・ 秋風にあなたのことを思い出す／ぼつんと輝く一片の月  
（笠井幸博「表現指導の一つの試み―漢文を短歌にしてみ  
たら―」二六号 一九九八年五月 全国漢文教育学会）

#### 三七頁

これらの短歌については、「原文の『一片月』『秋風』『玉関』などといった言葉を織りまぜながら、玉門関のかなたへとはせる思いを、うまく詠んでいる」と述べている。しかし、一方で「妻の切ない思いは敏感に感じ取って」いるが、「遠征の終結をひたすら願う気持ち、あるいは無用の出兵への憤りなどを読みとることは難しかったようだ」と評している。

本実践では、漢詩の理解を短歌で表現し、相互に優れたものを選び合い批評し合うことが、漢詩の理解と鑑賞、および短歌表現への意欲を生んでいる。

また、好きな一首を選び、学習者自身が、短歌で表現する。ついで、優れたものを選び批評し、その批評をもとに短歌を推敲する。この一連の過程に主体的学習が保証され、一斉個別学習ながら、批評によつて学びを深め合うところに協働的な学習も窺える。さらに、創造的な短歌創作には、「興味を抱いた詩の世界や、作者の心情、あるいは史伝などの印象的な場面などを、さらにより強く自分のものとするために、各自の言葉に置き換えさせようとのねらい」<sup>(注17)</sup>があり、ここに漢詩の内化が見いだされる。本実践の特色はここに見いだせよう。

#### おわりに―考察のまとめ

『新しい漢字教育』の創刊号（一九八五年）から『新しい漢

字漢文教育」四〇号（二〇〇五年）に掲載された論考の内、高等学校における漢詩教材の実践を中心に考察した。

### 1 漢文教育を取り巻く状況

社会的には、情報化・国際化・多様化・高齢化などの社会変化の拡大・加速化した時代であった。学習指導要領は、一九七八年版を境に能力主義から言語活動主義に、また、教科の領域も四領域から、理解・表現・言語事項の二領域一事項に転換された（一九九八年まで）。古典は、親しむ古典から国際化時代の古典教育として拡充が求められた。

### 2 漢文教育への問題意識

学習者の漢文嫌い、漢文離れ、受動的姿勢と、漢文教育を巡る社会的、文化的、教育的状況、また魅力ある学習者主体の漢文教育の方法への問題意識は強いが、読む力に関する関心は乏しい。

### 3 漢詩教育実践の考察

実践論考一三編を、「教師主導の学習指導」―五、「表現活動を取り入れた教師主導の学習指導」―三、「表現を取り入れた主体的学習指導」―五に分けて実践の概要を把握した。

「教師主導の学習指導」は、教師主導ではあるが、鑑賞における作者の位置付けの解明の試み、教材の開発、中国文学の理念に基づく鑑賞、コンピュータ利用、対比を導入した漢詩と和

歌の理解学習などの授業を拓く試みが窺える。「表現活動を取り入れた教師主導の学習指導」は、漢詩の理解・鑑賞から漢詩創作へと関連指導が行われている。「表現を取り入れた主体的学習指導」では、教材開発がなされ、訳詩（短歌創作）・イメージ画・鑑賞文作成といった活動とともに、グループ学習、問題解決の学習など主体的な協働的学習が組み込まれた学習指導が見られた。

主体的学習に関しては、昭和三〇年代、四〇年代から追求がなされてきたが、一九七八年版学習指導要領の改訂を受けて授業改善を求める教師の間では加速化されていると見える。漢詩指導において表現に結びつける実践は昭和三〇年代から見られ、その影響が考えられる。また、理解と表現の関連指導を打ち出した学習指導要領の影響も強いと考えられる。

### 4 観点別の考察結果

考察の観点から実践をとらえると、次のことが言える。

(1) 漢文観…漢文を歴史の重みに耐えてきた古典とし、自国の文化・伝統に対する関心や理解を深めること、国際理解・国際協調の精神の育成に資することとした。また、漢文は、簡潔で力強く、リズム感があり、明瞭で含蓄があり、明確な論理性を持ち、生徒を引きつける魅力があるとする漢文観が窺えた。

(2) 興味・関心・問題意識の喚起…考察した実践の多くが意図して喚起しようとしている。

- (3) 学習材の開発・編成…一部（大塚美枝子の実践など）には見えるが、教科書教材を基にしたものが多い。
  - (4) 主体的学習の保証…上記のとおり、観点(2)に基づく主体的学習の追求が窺える。
  - (5) 付けるべき読む力の設定…一部（松平隆子の実践）には言葉の力を付けることが想定されているが、多くの実践は単語の意味理解、句法理解から訓読する力などに限定されている。協働的学習…一部（笠井幸博の実践）の授業の中に協働的学習を見いだすことができるが、指導過程に意識的に設定している実践は少ない。
  - (7) 創造的読みと批評…創造的な表現をとおして読みを深める実践は多い。鑑賞文には批評も窺える。
  - (8) 学習者による批評を通した内化…創造的な表現に内化の過程が窺えるが、批評を通した内化については、明らかではない。
- 今後は、さらに対象と時代を広げて考察を加えるとともに、作品・分野別漢文教育実践史の研究を進めたい。

## 注

(1) 本観点は、古典（古文）教育実践の考察の観点として用いた。渡辺春美『関係概念』に基づく古典教育の研究―古典教育活性化のための基礎論として―（二〇一八年二月 漢水社 二二三頁参照）今回、新たに「漢文観」を加えた。

- (2) 水沢利忠「編集後記」（『新しい漢文教育』創刊号 一〇八五年一〇月 一六四頁）
- (3) 中村璋八「編集後記」（『新しい漢字漢文教育』一九九八年五月 全国漢文教育学会 一〇八頁）
- (4) 全国漢文教育学会「会誌」  
(<http://www.zenkankyo.gr.jp/kaisi/index.htm>)
- (5) 馬淵和夫編『改訂 高等学校学習指導要領の展開 国語科編』（一九七八年九月 明治図書 七九頁参照）
- (6) 北川茂治・市川菊雄編著『改訂 高等学校学習指導要領の展開 国語科編』（一九九〇年六月 明治図書 一二五頁参照）
- (7) 渡辺雅之「漢詩教材の鑑賞と作者との関係―『江雪』をめぐって―」（二三号 一九九一年一二月 全国漢文教育学会 五六頁）
- (8) 大塚美枝子「古典Ⅱ漢文における漢詩の指導―他教科との関連と、広がりを持たせる授業―」（二七号 一九九八年一月 全国漢文教育学会 六七頁）
- (9) 注8に同じ（七〇頁参照）
- (10) 注8に同じ（七四頁）
- (11) 塚田勝郎「公開研究授業報告―第一七回全国漢文教育学会大会―（コンピュータを利用した唐詩の指導）」（三二号 二〇〇一年一月 全国漢文教育学会 五七頁）
- (12) 長谷川国男「漢文の授業をめぐって」（六号 一九八八年四月 全国漢文教育学会 四九頁）

(13) 高屋定房「高校『古典講読』(二年)での実践報告―静夜思・絶句―」(二九号 一九九九年一月 全国漢文教育学会 五九頁)

(14) 注13に同じ (五九頁)

(15) 注13に同じ (六八頁)

(16) 笠井幸博「表現指導の一つの試み―漢文を短歌にしてみたら―」(二六号 一九九八年五月 全国漢文教育学会 三七頁)

(17) 注16に同じ (三五頁)

(わたなべ はるみ・京都ノートルダム女子大学)